

図書案内

2022 年 11 月号

担当 1-2 蕭 1-6 金山

『白』色の魅力

みなさんは「白」といえば何を想像しますか？雪や牛乳などたくさんの方が思い浮かぶでしょう。某芸能人の「白って200色あんねん。」というように、「白」という色はその無限に広がる種類の多さからとても奥深いものです。ということで、今月は11月、すなわち旧暦の呼び名で霜月です。霜の色やその冷たさ、冬へ向かう兆候であるところにちなんで今回は表紙が白（っぽい）本を紹介します。紹介した本は、図書館で貸出しています。

月
日
曜
日
日
直



『八月の銀の月』／伊与原 新

就活連敗中の理系大学生、堀川の行きつけのコンビニには無愛想で手際の悪いベトナム人のバイトがいた。堀川が見た彼女の本当の姿とは・・・科学というゆるがないものが主人公たちに希望の光を与える。表題作を始めとした5編のいずれも物語の鍵として科学が関わってくる。読むだけで心の奥底にあった気持ちが湧き上がってくるような短編集だ。（蕭）

人間の中身も層構造のようなものだ。地球と同じように。



『最近、地球が暑くてクマってます』／水野敏也・長沼直樹

今まさに世界中で問題となっている地球温暖化についての本です。ただ、この本は他の地球温暖化関連本と比べて明らかに異なる点が1つあります。それは、圧倒的に読みやすいことです。ほぼすべてのページにイラストや写真がある上に、文字も大きく読みやすい本となっています。さらに、ところどころに載っている白クマの写真がとてかわいらしく一気に読めてしまいます。かわいい白クマの頼みをついつい聞いてあげたくなる一冊です。（金山）

人間は、地球温暖化という共通の問題に立ち向かうことで
国境を越え、種を超え助け合ってつながることができるのです。



『生き物の死にざま』／稲垣栄洋



生き物の死にざまー。それはとてもはかない。この本はそんな死にざまをまるで1つの物語のように綴ったエッセイだ。アリやマンボウなど、身近な動物からなじみのない動物までいろいろな死にざまを時にはコミカルに、またシリアスに描いている。それぞれの生き物たちが限られた命を懸命に生きるその姿が私たちに教えてくれるものとは。自然界の死にざまのみならず、人間が生み出し、人間のために死んでゆく生き物たちもいる。命のありがたみとあらがえない「死」への運命を感じられる1冊だ。（蕭）

生命は尊く、かくのごとく残酷なのである。

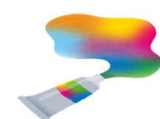


『AI VS 教科書が読めない子供たち』／新井紀子



この本の著者で数学者である新井さんは、ロボットを東大に合格させることはできるのかというテーマのもと、AIの研究に携わってこられた方です。彼女は。“東ロボ君”という名のロボットをつくり、試行錯誤を重ねてこられました。しかし、結局ロボットを東大に合格させることはできませんでした。それはどうしてなのでしょう。また、私たちが今後AI社会で生きていく上で、どのような力が必要なのでしょう。日本の驚愕の現状と、AIと共に生きる私たちへのメッセージが込められた1冊です。（金山）

そして、AI 世界恐慌がやってくる。



色は何色あるのか？

色って一体いくつあるのか、考えたことはありますか？もちろん色の種類分けには見る人の主観的な要素も入っていますから、一概に「〇〇個存在しています。」などという風に断言することはできません。しかし、私たちが実際に使い分けできる色は条件によって差はありますが、およそ150万色だと考えられています。とてつもなく多い数ですね。しかし、現在のフルカラーテレビはそれよりもはるかに多い1700万色ほどを表現することができるそうです。私たちが普段何気なく見ているテレビにも、そんなにたくさんの色が使われているとは、驚きですね。もちろん色の見え方には個人差があるので、自分と隣の人が見ている色とは違っているかもしれません。つまり、人によって「色は何色あるのか」という問いに対する答えは当然ですが変わってきます。ただ人はその違いを共有することはできません。色は脳の中でつくり上げられるものである以上、自分の感じている色を他人に説明するのは不可能だからです。隣の人の目の前には色も彩りも少し違った世界が広がっているかもしれません。そう考えると、色って興味深いものですね。

左巻健男【監修】／『光と色の100不思議』